

今もむかしも超人気

辻 憲男 (文学部教授)

卑弥呼がヤマタイ国の女王になったころ、お隣の中国は後漢の末期であった。魏・呉・蜀の三国が覇を競い、魏の曹操（そうそう）が黄河流域をおさえた。卑弥呼は239年に魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号を与えられた。

曹操と対抗したのは呉の孫権（そんけん）と、蜀の劉備（りゅうび）。劉備の配下に英雄・関羽（かんう）や張飛（ちょうひ）がいた。日本人ごのみは知謀の軍師・諸葛孔明（しょかつこうめい）であるが、中国では今もこの二人の武将の人気が絶大だ。ひげづらで勇猛、信義にあつかった関羽は、のちに帝君とたたえられ、商業の神として各地にまつられた＝写真。

英雄に対するは美人。西施や王昭君、楊貴妃は日本でも早くから知られた。西施（せいし）は病気の時によく顔をしかめたが、これを見た女たちもそのひそみにならってしかめっつらをしたという、まさに傾国の美女。王昭君（おうしょうくん）は絵かきにワイロを使わなかったために醜く描かれ、北方の匈奴の妃として送られた、悲劇のヒロイン。さて『三国志』の時代には魏の王子・曹植の義姉への悲恋の逸話があるが、ここにもう一人、貂蟬（ちょうぜん）という歌姫がいた。後漢の暴悪な権勢家に近づき、たくみにその父子を離反させるという役まわりだが、これは小説『三国演義』の作り話かもしれない。ともあれ、中国では他の三人に劣らず、今も人気の高い美人の代表である。



神戸の関帝廟。県庁の西、中央区中山手通七丁目にある。